んだといふことから之を我國にも使つて餌取を賤しむ風が生れてきたのであらうと云はれて居ります。まことにつまらない所からはじまつたのではありませんか。しかし皆さん、こゝに間違へられると困ることがあります。その時代は決してその人を賤しんだのではありません、たとへ今日のおひるまで餌取をして居やうとも今日のおひるから、お仕事を代へてお百姓をすればもう何でもなかつたのです。其の人はもうみんなから尊まれ、一人前につきあつたのであります。たとへ親がキヨメの仕事をして居やうとも自分は其の仕事をやめて外の仕事をすれば、それから後は天下の公民として、誰憚る所がなかつたのです。今は差別する方の祖先の中でも曾つて餌取をし、キヨメをしてゐたことがあるかも知れません。いゝえ日本國民の大部分の祖先が法師となり落伍者となつて暮した時代があつたに違ひありません。思へば神の御手に開かれ給ひし、神の御末を汲ませていたゞく國民同志は互に落伍者となり公民となりその仕事に對していみきらふことは誠に申譯ないことではありますまいか。肉食を嫌ふ等といふことは之は佛法の發明であります。吾が國は肉を喰べることを嫌はぬ國でした。畏くも吾が皇室の御先祖と仰ぐ、彦火々出見尊は御自身獸獵をなされたと傳へられて居ります。勿論獸の肉も御召上りなされたに違ひありません。神々様にも勿論御供物として之を捧げました。上は一天萬乘の大君を始め奉り、下は一般民衆に到る迄肉食は普通のことであつたのであります。

然るに佛教は更に神道にも影響を及ぼして、神道に於ても肉食を忌むやうになりました。然し昔は神官を「ハフリ」と申しまして、神への犧牲を屠ることを主なるお仕事としたのであります。神官も亦

屠者（エタ）であつたわけです。斯うして餌をとり、死者汚物をキヨメル仕事をいみきらふ風をもちつゝ、戰國時代や德川時代へと進んで行つたのでした。

戰國時代！、それは勇ましい時代でした。私のお話しやうとする歴史の上にも大きな變革があつた時代です。それは次のお話にうつすことに致しませう。では今日のお話は之で終ることに致します。落伍者の出來たわけ、そして落伍者の流れて行つた所についてお話したのでしたね。

〔第五話〕

之から話をすゝめますがその前に今迄のお話を一すかいつまんで申しますと、始は神代——和やかな差別のなかつた時代——次は神武天皇の御代——皆分業してその仕事に勵んだ時代——そして何千年かの年月の奈良時代—平安時代——室町時代にはどうであつたか——。落伍者の出來た時代、そして仕事に賤しいとか尊いとか、考へて來た時代でありました。仕事のない人はどんなになりましたか。落伍者の流れて行つた所、それは、斬取强盜になるか、物を貰つて歩くか、それとも人の賤しむ仕事をする人になるかといふ三通りでした。人の賤しむ仕事、それには塵の餌をとること、死人をとりあつかふこと、汚れた處を美しくすることのお仕事でありました。そしてそれを賤しむのも又つまらない佛教や其他の迷信から來たのでした。

これ等の時代を通つて世の中はだん〳〵と亂れに亂れ、戰國時代になつたのでした。

戰國時代それは丁度徒歩競爭のやうでありました。自分の力次第で一番にでもなれた時代でありま

す。昨日迄は桶屋の息子であらうと、百姓の子であらうと、そんなものは問題でありません。昔の境遇も地位もそれは何でもなかつたのです。後をふりむかなかつたのです。前へ前へと進んで行つた時代であつたのです。唯一生懸命です。進む一方です。走るばかりです。

然し戰國時代の徒歩競走は足の早い者とか、よく走るものは一番にはならなかつたのです。一番となり成功するには何が大事でありましたか。それはもう皆さんの頭の中にきちんと判つてゐるでせう腕です、力です、武力です。武力中心に爭つたのです。

腕一本、槍一筋で天下もとれたのです。戰國時代に武勇の名をあげた人々は誰でありましたか。今川義元、上杉謙信、武田信玄、北條早雲、毛利元就、伊達正宗、そして織田信長、豐臣秀吉、德川家康等でありましたね。それ等の人々は、地方から族をあげたのでした。落伍者の人の子もあります。百姓の子もあります。そして其等の人はお互に力を競つたのでした。一生懸命爭つたのです。

奈良の大乘院の尋尊と申すえらいお坊さんが書いた本に、

「近頃は土民――お百姓ですね――侍の間をかへり見ない時である。前々たとへ非人であらうとも、守護となり國司となることが出來る。」といふ樣なことを書かれて居ります。そして又

「近頃はしかるべき身分の者はおちぶれて落伍者となり、たとへ落伍者であつても立派に出世することが出來る。」

といふ樣なことも書かれてあります。

昨日迄、えぼうしを着、笛を吹き、細太刀をはいて居た大官人、刀の拔き樣も、陣太鼓のならし樣も、わらぢのはき方も知らぬ公卿達の中で戰爭は出來ないから落伍者となつて、其の日〳〵を送らなければならなかつた人もありました。春の花見や秋の紅葉狩り、歌を詠じ詩をつくり、管絃をもて遊んだ人々も戰のために家を燒かれ土地を奪はれ、木の下を宿りとし、草を枕として變轉の生活をしなければならなかつたのでした。中央の威令少しも行はれず、功名をねらい、富貴を望む者は此の時とばかりに蜂の巣をついた樣におこつて參りました。人を殺しても、物を盜んでも罰する者もないのですから互に侵略爭奪を事としたのでした。友達同志も自分の土地を擴げる爲には敢て之を打ち、主人を亡して少しも憚らず、强い者は弱い者を併合し、大きいものは小さいものを呑んで、全國に群雄が割據し共に相爭つて劍と鎧と盾とを常に持つ生活でした。戰は至る所に行はれました。昨日迄榮えた家も戰に敗れば主人は首打とられ、家の子郎黨は散々伍々、主を代へたり、落人となつたり、百姓は土地をとられ財產も奪はれて、山も野も村も燒野が原とかはり行く、有樣となつたのでありました。今迄の名門も舊家も、みんな此の時代に倒れ、落伍者となり、それに打つて代つて今迄の家臣とか微臣とかで、腕に覺えのある者は新に興るといふ樣に、社會の舞臺は一變したのでありました。室町時代の落伍者で所謂公民權のない非人といはれた、伊勢新九郎は時勢の波にのつて北條早雲となりました。百姓の子日吉丸は、その智力と腕力によつて天下を平定して關白豐太閤となつたのでありました。織田信長は平重盛の後裔だとは言はれて居りますが、それも言はれてゐるだけではつきりした證

據も何もないのであります。徳川家康も又新田氏の子孫だと言はれては居りますが、之も歴史の本を見ても判る通りで只言はれて居るだけで本當の事はどうやら判らないのであります。其の頃は昔の源氏、平家と言へば大勢の部下を集めることが出來たのであります。其の爲に源氏、平家の名をかたり、いゝ加減な系圖を作ることが賢い武將の間には行はれた所であります。徳川氏も、はじめ平家を名乘つた時もあり、又後に源氏だと名乘つたのでありまして、誠に明白ならざる言ひぐさであつたのでした。

百年の間皆が爭つたのです。そして落ついた所はどこか、織田信長によつて地はかためられ豐臣秀吉によつて天下統一がなつたのでした。

斯うしてやうやくおさまつた大名達の顏ぶれは、大がい昔の落伍者とか、强盜の群とか、名もない豪族の家人、下男とかが大名になつて居ります。先づ日吉丸が昔仕へた斬取强盜の親分は、阿波の國の大名となつて居ります。賤しい仕事として嫌はれた、桶屋の小僧は安藝守となつてゐます。乞食坊主が或大名となつておさまり込んで居たり實に色々です。試みに皆さんは徳川幕府の下にあつた大名の一人を撰してごらん。そして其の人の姓は戰國時代の前に名高い家であつたかを。みんなその時代に出來たのです。そして周章てゝつくつたのは何だと思ひます。

系圖です。自分の祖先です、いゝえ自分の祖先ではありません。自分に都合のよい昔のえらい人と自分とを結びつける系圖を後からこしらへたのです。

そして又困つたことがありました。それは落ぶれた人々の中に昔の名門の系圖をもつてゐる人のあることです。先祖代々の寶物等と共に、大名達から見れば、うらやましくほしくて仕方のない立派な系圖をもつてゐました。澤山のお金をもつてそれを買取つた大名もありました。買つた系圖なんて何思へば馬鹿々々しいことでありますが、けれども落伍者や、非人や、野武士や、斬取强盜等から大名となり領主となつたと言はれたら名を重んずる人々はたまらなく厭だつたのでせう。ごまかしの系圖をつくるもの、金目をおしまずに系圖を買ひとるもの、そして終には領主の命令でもつて、系圖を全部とり上げて燒きすてゝしまふ等のことが行はれたのです。刀狩と言ふことも行はれました。落人は名刀を家の寶としてもつて居ります。それ等を全部狩集めることに依つて祖先の武士であつた事も、豪族であつた事も、公卿であつた事も何も判らないやうにしてしまつたのでした。戰國時代を判り易く言ふならば、上と下とが入れ代つた時代でもあります。昔の落伍者が名をなし財を得、その時代の富貴をほしいまゝにしてゐた人々が落伍者に入つてしまつた時代であつたのであります。何もかも一所になつて、ゴチャ〳〵になりそして上にある者と、下になる者と爭つて、そして勝つた者は上になつた時代であります。腕一つで爭つてそして勝負を決した時代です。同情とか、仲よしとか、和やかとか、溫みとか、正直とか言ふことの忘れられた時代であります。日本のほんとうの心を忘れてしまつた時代です。國を開いて下さつた神々樣に申譯のないことを起したのです。

かうした考へは今しばらくつゞきます。徳川時代、私は又改めて徳川時代について皆様に聞いてゐたゞきたいとがあります。改めてお話ししませう。

戰國時代は曉しまれた仕事をした者も、尊まれた身分の人も皆一様に爭つて、そして又改めてその仕事をわけなほした時代であつたのでした。差別なんかふいて飛ばされて何もない時代だつたのです。唯爭ひだけがあつたのです。ではしばらく休みませう。そして汚れた戰國時代の話によつて汚された耳を美しくするために、あの國開きをお祝ひする御歌、紀元節の唱歌を歌ひませう。（歌）

〔第六話〕

歴史もどんどん進んで參りました。戰國爭亂の世も終には徳川幕府によつて統一せられました。平和はおとづれたのです。國民多年の望みである、しづかな〳〵世がおとづれたのです。江戸の町にも久方ぶりに平和な春風が吹きそよぎました。島原の亂を最後に世は刀や鎧を要しなくなりました。昨日迄戰を續けたと思へない程靜かになつたのです。

町の人はみんな大喜びでした。田や畑をふみあらされる心配もなくなりました。家も燒かれねばお米や、お金をもつて行かれもしません。昨日までは毎日毎日生きて居る心持もしなかつた者が何の心配もなくなつたのですから、之程うれしいことはありません。國民は大へん喜んだに違ひありません。然し皆さん其の喜びは、その平和は神代の頃の様な、又神式天皇様が御位におつきになつた時のやうな心からとけあつた喜びではなかつたのです。心の奥迄、和かに暮すことが出來なかつたのです。明るく朗かな氣持で日を送つてはいなかつたのです。皆さん何故でせうか。お話しませう。

それはむつかしいむつかしい規則があつた爲です。越えてはならない制度が設けられたのです。それを階級制度と呼ばれて居ります。封建制度等と呼ぶ時もあります。飛び越えてはならない溝なのです。將軍と大名との間には大きな階級がありました。大名小名は將軍の前にはちつとも頭があがらないのです。大名小名は將軍の言ふことを唯服從するのみであまりした。一言も返答することが出來ないのです。將軍は遙の上座に殿につゝまれてゐるのです。そして大名小名の中でも、徳川家康の親類の者、そして三河以來の家臣、後から加はつた武將等と親藩、譜代、外様の三通りに分れて互に其の中にも階級を設けたのでありました。大名小名の下には武士があります。侍です。殿様と武士との間には之亦大きなへだたりをもつて居りました。殿様の御機嫌に觸れますと、忽ち切腹を命ぜられるのです。土地もとり上げられるし、家も召上られます。武士の間でも家老と平侍の間にも又格式がありました。そして侍の下に農、商、工、そしてその下に今の差別せられてゐた人達をもつて行つたのです。そして其の間には大きな格式をつくりました。何故こんなことをしたのか、それは徳川家康には大きな大きなはかりごとがあつたからでした。

徳川家康の頭にうかんだものは、先づ第一に天下をとつた喜びであります。小さい時から色々苦勞をして來た彼でした。待ちに待つて、色々とはかりごとをめぐらしそして後に天下をとることが出來たのでしたから彼家康にとつてこれ程うれしいことがなかつたに違ひありません。心から喜びにひた

つたに違ひありません。そして彼がこの喜びを末の末迄、自分の子や孫の時代まで残して行つてやりたいと考へたのでした。

之も人間として無理もないことで誰でも考へるところであります。今の人でも田や畑や山やお金を子供に残してやりたいと考へて居りますもの。子孫の爲にはからうとは誰でも考へるあたり前のことです。

どうすれば子や孫迄にも此の喜びをのこすことが出來るか、家康は色々と考へた結果次の考をめぐらしたのです。今の世の中をこのまゝで平和に何時々々までも傳へることにしやう。このまゝに續かせやう。そして考へ及んだのは階級制度といふものです。家康はこの天下を治めたものゝこのまゝに太平の世としてつゞかせる政策として動かす事の出來ない階級制度といふものをつくつたのである。大名は絶對に將軍に從ひ、士は大名に服從し、士の下に農人、その下に商人といふ樣に大きな階級をこしらへてしまつたのです。この考へ方は大名達を大へん喜ばせました。何故でせう。それはかうなんです。大名等は將軍にはなれなかつたけれど、自分の領地があつて、その領民を自分の思ひ通りにすることが出來る。この生活のためには心配のない、そして士以下の者にえらぶれる地位を子孫の代までも、下さるものとしたら、之程うれしいことはない。かう考へまして階級制度といふものを喜んだのです。上からおさへられると、下の人にえらさうにしやうとするのは人間のくせであります。將軍さんは大名を目の下に見下しますから大名も亦士等を目の下にして士の前でえらぶります。即ち下

の者との溝を大きくして、下見下してはつまらない虚榮心とか、優越感とか云ふものを滿足させて居たのです。

武士は仕へてゐる大名にえらぶられますからくやしくて仕方がない。そのくやしさを男らしくもない弱い者にはらさうとしました。即ち士は、百姓や町人を見下し輕蔑したのです。「土百姓」とか、「素町人」とか二口目に言つてはいぢめたのです。刀の鞘に觸れたといひ、影をふんだといひ等しておせう。士や大名や將軍にはもつて行くだけの勇氣はありません。もつて行つたら殺されるもの。之も亦武士達のやうに弱い者にもつて行つたのです。弱い者――それは誰か、それは昔佛教徒によつて賤しい仕事だと見られた仕事、餌取、キヨメ等をした人達でした。

こゝでこの階級制度といふものをも少し説明しませう。この頃でもやつぱりお百姓は大切だつたのです。經濟の基になるものが農業でした。ですから百姓からお米をつくつてもらつてそれを納めさせなければなりませんでした。ですから百姓の下にも一つ階級をこしらへなければ都合がわるかつたのです。そしてこの人達が士が百姓町人にえらぶる代りといたしまして百姓町人等から又一段下にみなされる事となりました。特別に賤しい樣に言ひなしたのです。一段低い身分だと言ひはじめたのです。吾々百姓町人樣とは同じやうにはいかんといつたのです。餌取といふ言葉をとり上げてその代り

穢れ多しといふ字をあてはめたのです。この百姓町人のしたことが、今日までも禍を殘すもととなつたのですから百姓町人のその考へこそにくむべしです。

けれども百姓町人だけを責めてもいけないのです。上は將軍からえらぶつたのですから階級制度をにくむべしです。封建制度といふのがいけなかつたのです。戰國の爭亂に依つて、組みかへられた世の中は、そのまゝ德川時代となりました。落人の群は餌取をしてゐました。キヨメ——お掃除、死人の取扱ひ——をしてゐた人もありました。その人々こそ悲しむべき人々です。何故ならば、戰國時代の前迄はたとへ餌取やキヨメをしてゐても、それをやめてしまへば普通民として、立派な公民として立つて行つたのに、そして亦戰國時代には、落伍者や浪人共が槍一筋で立派な殿樣にまでもなれたのに、人を殺すのがきらひなおとなしい人々餌取やキヨメをしてゐた人は知らず〳〵の間に、苦しい、苦しい境地に置かれてしまつたのですから、一番悲しむべき人々なんです。それに德川時代になつてから餌取の言葉をとられて、穢多しといふ字をあてはめられ、そして、子孫の末迄もその身分におしつけられたのですもの、自分の仕事——賤しいといはれてゐたあの仕事をやめても、もう駄目です。その仕事をやめても、もう普通の身分にはなれなかつたのです。階級制度ですもの。德川時代のはじめに、餌取やキヨメをしてゐた人々こそ一番可愛さそうな人だつたのです。その人々がいつまでも、いつまでも一番下の身分におかれたのです。これが皆さん、今の差別のはじまりなんです。仕事を差別した時代、それを過ぎて終に一かたまりの人々を差別する時代に入つたのです。最も悲しむべき時

代に入つたのです。今の差別のはじめが斯うしてつくられたのです。德川幕府の最初の階級制度によつて一番下におかれた人々をいつ〳〵までも下に居る樣に、町人や百姓の下におかれたのです。

けれど皆さん、德川幕府のはじめの頃は、卽ち差別といふものをつくつた頃は、ほんの少しの差別だつたのです。昨日迄何もなかつたものを、今日から一段低い樣に見て行かうといふのですから、さう直に大きな溝をつくる譯には出來ないのも無理はありません。又この時代にはこれらの人々はその昔の樣にはいやしめられるのみでなく保護されてゐました。地位はひく〻、おとされてゐますが公課等も免ぜられてゐました。

德川幕府のはじめ頃は、餌取の子が殿樣の子姓となつたり、又餌取やキヨメをしてゐた人の女が武士のお嫁になつたりしたことが澤山の書き物に殘されて居ります。今から百五十年程前からだん〳〵とへだたりを强くせられたのです。丁度三角形の頂點を德川幕府のはじめに置いて下に二つの邊がひろがつて行く樣に、はじめは間はせばかつたのが、だん〳〵と年がたつにつれて、そのへだたりが大きくなつて行つたのでした。圖解しませうか。(黑板に書く)

この圖を見ても解る通り明治維新の前は一番差別がひどかつたのです。世間の人は差別は千年も前からあつた樣にも言ひます。筋がちがふんだといふ人もあります。大きな間違ひです。皆さんのお父さんや、おぢいさんが言つてゐるとすれば、それは信ずべきものではないのです。何故つて加藤清正と源義經とどちらが先だか知らないのに。何で世の中のどん底のなりたちなど知つて居りませう。

日本歴史で一番研究が深いといはれて居ります元東北大學教授喜田博士のお話ですから私等は信じてよいと思ひます。さあ時間も大分せまつて來ました。

たつたもう一言申しませう。その德川幕府の階級制度で一番下におしこめられた人々はどんな苦しみをしたか。いろ〳〵な血の滲む物語りがあります。でも過ぎ去つた痛々しい痛手にふれることをやめておきませう。たゞ皆さんに、きめられた狹い土地に、きめられた仕事をして居たといふことを申しませう。そして狹い所に大勢が、きめられた仕事をして生きて行つたから人がふえてもよそへ行けないからそこですむ。そしてだん〳〵と貧乏となり家が汚くなつて來ます。今家が汚いとか、言葉が惡いとかいふのはその罪が誰にあるのでせう。昔のことはさて置き私達は苦勞をして來た私達の兄弟のやつれた姿を心から親しんで行かねばならないと思ひます。その話は亦あらためてするといたしましてたゞ歴史のありのまゝをお話をします。德川時代のお話は之で終りませう。

そして歴史のお話の最後として、今一時間明治維新について。お話申上たいと思ひます。「今の差別は、德川幕府の現狀維持の政策で生れた。はじめは薄かつたがだん〳〵と濃くなつて來た。」これだ

けをしつかりとおぼえて置いて下さい。

〔第七話〕

歴史のお話も、どん〳〵進んで參りました。今日は其の最後の明治維新に及びたいと思ひます。芝居でいつたら大詰ですね。

德川幕府といふ大きな家も、立てられた當座は柱も頑丈で壁もしつかりして居りましたが、年がたつにつれて壁落ち柱くちて崩壞の運命にあはねばならなくなつたのでした。滅亡の原因は色々と擧げられませうけれど、最も大きな、そして根本をなす原因は、前に申しました德川幕府の唯一つの武器である階級制度が崩れた爲であります。階級制度といふのは、前にお話し申しました通り、將軍、大名、侍、百姓、町人、工業者、そして差別せられてゐた人々——エトリ、キヨメ——その下に非人の區別をつけ、先祖代々其の仕事、其の地位を受けつぐのでした。侍の子は馬鹿でも侍となり、百姓の子はどの位勇氣があり、賢くてもやはり百姓をしなければならないのでした。侍の中でも祿高の多い侍と、祿高の少い侍との間には大きなへだたりがあつた。その祿高の少い輕輩の人々は、祿高の高い人々の下におさへられるのに辛抱できなくなつて來ました。又百姓、町人等は侍の威ばるのにはだまつて耐〳〵てゐることは出來なくなつた。そして國民みんな、その時代の世の中の組み立てを心から疑に思つた。さうした組立ての上に、平然と立つてゐる。德川將軍に對して不滿が出て來たのも無理ではなかつた。それ等の人々は先づ、天皇樣御親政の代を心から願ふやうになつて來ました。

神代の時代の尊かつたことを國文學で知りました。神武天皇樣の大御代には、國民には何等の差別もなく、兵士と農業をする人とは同じであることを知つたのです。そして、天皇樣をないがしろにして、天下に覇を唱へてゐる將軍がにくらしくなつて來ました。階級制度の本家を憎らしく思つて來た。それは西鄕隆盛や、桂小五郎や、大久保利通や、薩州、長州の、藩士だけが考へたのではなかつた。世の中の人々の大多數は、階級制度や將軍政治を一刻も早く取り除いてもらはうとしたのであつた。それ等の議論は尊皇討幕の形をとつて現はれて來ました。

然し其頃、將軍自身の方にも、階級制度の弊害の多いことを氣付いてゐた。先づ第一に人を禽獸の如く考へて來たことの間違ひを力說する慧眼の士もあつた。民權を復せしめよ。との議論が出た。

「夫レ天地ノ人ヲ生ム。人ニ非ザレバ則チ禽獸カ草木カ土石ナリ。安ゾ人体ニシテ獸性ナルモノアランヤ、西土既ニコノ物ナシ、豈特ニ本邦ニノミコレアリトセンヤ。」

と堂々七百六十九文字の漢文でもつて建議せる勤皇憂國の士、千秋順之助氏は論じて居る。彼は更に論じた。

「今ハ彼等モ其ノ境遇ニ諦メテ井ルモノヽ、若シ一朝慨然トシテ其ノ人間性ニ目覺メルノ日アランカ彼等ハ必ズ憤然トシテ其ノ群類ヲ率メテ運命開拓ノ爲ニ戰フデアラウ、若シサウナルト實ニ天下ノ一大憂患デアル。苟クモ天下ヲ憂フルモノハ決シテ姑息ノ方法ヲ考ヘス、此ノ際斷乎トシテ宜シクコレヲ民籍ニ復スベキデアル」と。

明治維新にもこんな立派な考へをもつた人もあつたことは實に喜ばしきことである。彼の論の最後には、

「嗚呼、國家四海ヲ以テ家トナシ、萬民以テ子ト爲ス。一視同仁愛ハ禽獸ニマデ及ベルニ、獨リ彼ノ徒ノミヲ捨テヽ、改メザルハ豈缺點トナサザラン耶、乃チ早クコレガ所置ヲ、ナサザルベカラズ。」

と述べてゐる。

「もとの民權にかへせ」と說いた所に私達は心から敬服する次第である。斯うした識見によつて、國中大騷ぎの慶應年間、卽ち四年正月、或る一部の差別せられてゐる人は民權にかへされたのでありました。

明くれば江戸城開け渡し、皇政復古の大業なり、階級制度は撤去せられました。百姓、町人も士と同じく堂々と天下の民となることを得たのでありました。皇政復古と共に明治政府が生れました。國民の聲は重んぜられることゝなりました。公卿、大名、武士の區別なく、立派な人は重く用ひられました。そして天皇陛下は、大政一新の趣旨を、天下に周知せしめる、御思召しによつて慶應四年——明治元年——三月炳乎として日星の如き五箇條の御誓文を御渙發せられました。卽ち

「廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ、知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」

であります。此の御誓文を天地神明に誓ひ、武家の政治によつてつくられた、暗い雲を、すべて一掃し赫々として輝き渡る大政維新の大綱を、御示し下されたのでありました。つまらない區別をつけた世の中を全部御たてなほしなされたのです。侍も、百姓も、町人も皆同じやうな權利をもつてゐることを御證しなされたのでした。臣民互の爭や、差別や、賤しめることは間違ひであることをはつきりと御示し下されたのです。そしてこの時國内に御宣布し給ふた御宸翰を拜し奉るに、

「中世以後武家が政權を專らにして、億兆の父母たる天皇をして赤子の情を知ること能はざる樣に上下を隔絶せしめたのであつた。此の度、大政が建國の古に復ることゝなつた。此の時に方りて天下億兆一人でも其の所を得ないものゝあることは皆朕の罪であるぞよ」と、仰せ給はつてゐるのであります。天下の民、皆が各國民としての權利をもたなかつたら天皇樣の罪だとまで仰せられたのであります。

この畏くも有りがたき大御心を拜察致しますれば覺えずうれし涙が滂沱として流れ出るではありませんか。百姓をして居らうとも、あきんどであらうとも、志すところ、誰はゞかることなく爲し得る樣にして頂けるとは此の上もないうれしいことであります。私達は一刻も早くこの陛下の大御心を体し今までの間違つた考へから、同じ陛下の御民を、卽ち自分の兄弟であるところの人々を、穢子か他人のやうに誤り信じ切つた事を深く〳〵お詫びしなければなりません。

明治四年八月二十八日に太政官第六十一號布告として更に國民に差別のないこと。差別し合つてはならないことの御詔勅を頂いたのであります。三千年の歷史を誇る國民が近々百七十年餘の差別を取除くのに、何故ぐづ〳〵としてゐるのでせう。一刻も早く取り除かれねばならぬことなのです。

歷史のお話を終るにあたりまして、明治天皇の御聖德の一端をお話し申上げることゝ致しませう。

明治天皇連光寺行幸の際一視同仁の御聖德

東京府下に連光寺といふ所がある。こゝは元御獵區であつたさうです。

明治天皇は明治維新の御當初より御繁忙な御政治のため玉體を御靜養遊ばさるゝ御暇が在らせられなかつたがこの連光寺の御獵區には屢々行幸あらせられたさうです。

天皇が初めてこの地に行幸あらせられたのは明治十四年二月二十日でした。この連光寺御兎狩の御獵區内には明治維新前まで舊幕時代に差別待遇を受けた一部落があつた。そこでこの最初の御親獵の節側近の案内官等はそこに御野立所を設けることを憚つて御遠慮申さんか如何すべきかと評定した。ところがなか〳〵決しないので遂に天皇の御聖斷を仰ぐ事になりました。すると聖上には何等御躊躇あらせられず言下に朕は兎の居る處ならばいづこへでも行く、又その村民も他の村民と同樣に夫々奉仕せしめよ。と宣はせられ御目ら鷹匠足袋に白木綿の紐のつきたる御草鞋を召させられ黑土を踏んで同村民と共に御獵を御實踐あらせられました。

この御事こそ實に天皇の連光寺行幸の御聖德の最高なるものであると存じます。

天皇が御晩年におかせられて如何に當時の御行幸を深く御心に殘されたかは天皇の御在世の最後の

御年の御製に

雪ふれば胸にくらおき野に山に

遊びしむかしおもひいでつゝ

と仰せられた事に依つても御うかがひすることが出來ます。この一視同仁の廣大無邊なる御聖德こそ、我等が永く國民に傳ふべきことがらであります。

第三講

〔目的〕

融和問題とは如何なるものであり又差別が如何なる損失を招くものであるかといふこと並に融和運動の變遷過程と吾等の覺悟とについて知らしめることにある。

〔注意〕

餘り專門的に走つて童心に逆行してはならない常に兒童心性に立脚して中正を旨とすべきである。社會運動ではなく教育であることを念頭におくべきである。

〔第一話〕

長い歴史のお話を聞きまして、差別は極く最近のことで、それもつまらないことに原因して居ることをはつきりとつかむことが出來たと思ひます。神代のこと、國のひらけた頃のこと、奈良の都、平安の都、その頃は差別といふことはなかつたこともききました。唯々お仕事の中で死者を扱ふ人々と

屠の餌を取つた人々とが、その仕事だけをいやしいものだとされたのでした。その理由もほんのつまらない迷信からおこつたのであつたことも皆樣のきかれた通りです。そして戰國時代、上と下との入れ代り、德川幕府、階級制度の誕生、そして最もいやだとされてゐた仕事をしてゐる人を、一番下におきエトリといふ言葉を取り上げて、いやないやな字、穢れ多しといふ字を與へたのでありました。そして今迄無かつた差別といふ溝を陛下の御民達にこしらへたのでした。誠に誠に申譯けないことです。明治の維新には、卽ち明るき御政治の御始めに舊來の陋習を破られ天地の公道にもとづくといふ尊い御誓文を拜しました。明治、大正、茲に六十年餘、チョンマゲや帶刀が禁止せられ、洋服や、汽車や色々と文明が進んで參りました。

昭和の今日は世界の大强國として、躍進して來た吾國であります。世界の國々にも決して負けない程文化は進んで來たのです。それだのに未だ、未だ、一番大事なことを忘れて來て居ります。舊來の陋習の大きなものが殘されて來て居ります。それは制度では約七十年前に廢止せられては居りますが相變らず世の中に存在する差別といふことなのです。「差別」それはたつた二字ではありますが、この二字の爲に苦しみや、痛さを、日毎日毎に嘗めさせられてゐる人は、どれだけあるかわからない程大きな問題です。差別のあることによつて損失を受けるもの、それはいつか御話し致しました。

第一に差別せられてゐる人の苦しみであり、第二に差別する人の人格上の缺點であり、第三は國家社會の大きな損失でありました。差別せられる者は、それは〳〵大きな苦しみを受けます。同じ人間

だのに人らしく取扱つてくれないのですから、之程大きな苦しみはないのであります。人々が冷い眼で見ます。牛や馬を扱ふ樣に扱はれます。家を一歩出づれば、何時もびく〳〵と暮さなければなりません。損もします。田を借る時は小作料を普通より高くとられることが多いのです。ものを賣つても普通の人より安くしなければ買つてはくれないのです。お宮へお參りすることを禁じられてゐる處もあります。人々には見離される。神樣にもお參り出來ない。その人々はどうすればいゝのでせう。或る人々はだん〳〵惡い方へ向つて行きます。どうせ嫌はれるのなら、やぶれかぶれだ、亂暴してやれとだん〳〵ひがんでも行きます。丁度機子はひがんで行く樣にです。狹い處に住まされるから、不潔にもなります。食べる事に忙しいから、洗濯する間もなくなります。衣服に臭氣があるかも知れません。それを又身体に着いてでもいる樣に申します。大きな考へ違ひです。こんな人にしてしまつたのは、日本人總べての責任です。私達日本人は惡かつたからです。勇氣もあり、忠義も盡して來ましたけれどたつた一つ、人を人として取扱ふといふ事を忘れて居たのです。一番下におしつけて來たのです。皆陛下の御民であることを忘れて居たのです。ああ、惡かつたと御詫びしなければなりません。私達の祖先の間違ひは、私達でつぐなつてあげねばなりません。目に見る時それは汚なからうとも、學校を休む程貧乏であらうとも、亂暴であらうとも、心から仲よく融け合はなければならないのです。

釋迦は、つづれや襤褸をまとつて居ても尊かつた。禪海は青の洞門を自分の罪ほろぼしとして三十

年の年月一鑿の槌、一本の鑿でほりあかしたのでした。

罪ほろぼし、さうです。私達も祖先の罪滅ぼしとして、一刻も早く兄弟達と手を結び合はなくてはなりません。家が亂れた時、仕方なく家を出て苦るしんで來た弟が今歸つて來た時のやうに、皆温い心で交つてあげねばならないのです。差別せられるといふことは、どんな場合でも決して愉快なものではありません。お友達同志が三人道を行つて、その二人が面白さうに話をして、たま〳〵他の一人が除け者にせられたならば、そこに少しも隔てのない場合でも、その一人は非常に不愉快に感ずるでありませう。皆さんそれが若しさうとは口には出さないけれど、あれは昔から差別せられて來たものだと、其の總ての人々を一般社會から仲間外れにして、自分自身で何の罪惡を犯したもので無いにも拘らず。唯其村に生れたと云ふ理由から、其の住む處も、そのお仕事も思ふ樣に選ぶ事が出來ないとしたら、その差別せられる者が感ずる不愉快、その被る不利益は果してどんなんでありませう。そこでその人々は何時も疑の目をもつて世間を見る事になります。おど〳〵とした素振で世を渡ることになります。事實さうでない時でも、何か自分の噂話でもしてゐるのではないかと氣を廻す樣にもなります。自然と一般世間に對して恨みを持つ樣になります。子供が一寸した喧嘩をしてでも、何か内の子供を分け隔てでもして起つた樣に思つて、腹を立てることにもなります。ですから、この人達は差別する人達の中にまじつて、いつもいやな思ひをして暮す樣になります。そして同じ樣に差別せられるお互同志でかたまつて住む方が氣樂になるのでした。その昔から差別せられた村に、しつかりと手

を組んで結び合ひを固うしてこそ、始めてよく世間の輕蔑や、差別待遇に對して、自分達を守つて行くことが出來るのでありました。皆さん其の中の或る人が唯一人其の差別せられて來た村からはなれて、他に適當な住み場所を求めて行つたとしませう。そしたら、今の世の中の人々は、この人をどんな取扱ひ方をすると思ひます。先づ家を借りて、何か商賣でも仕樣と思つても誰も家を貸して呉れる者はないのです。それでは土地を買つて、自分で家を建て樣としましても、殆んど土地を賣つて呉れる人さへ無いのです。それで皆んな生れた場所をかくして行きます。そしたら皆んなが普通に交つて呉れます。でも心の中で何時もビク〳〵としなければなりません。自分の生れた場所が知れるのでは無いか知ら、自分が昔差別せられて居た人の子孫だと判るのではないか知ら、と寢ても覺めてもそのことばかり心配になるのです。なつかしい故郷の話も心から喜んで出來なくなります。正々堂々と生れた場所を云へないのです。村の人が訪ねて來て呉れたら、大變うれしい懐しいものであるのに、實は嬉しいものではなく、大變悲しい不安な氣持ちで迎へなければならない樣になるのです。村からの便りは後かたもなく燒いてしまひます。裏には村の住所が書かれて居りますもの、村へ手紙を出す時はそれこそ人にかくれて書くのです。見られては大變ですからね。そして又、業成り名遂けて錦を着ても故郷へは歸れないのです。祖先のお墓に成功を告げることさへ出來ないのです。お參りすることが出來ないのです。肉身の人々が村に居ても會ひにも行けないのです。斯うして窮屈に暮して居ります。そしてそれが若しも生れた場所でも知れたらどうでせう。隣の人々は全く交際をして呉れなくな

ります。其の子供が家を出づれば、隣の子供はみんなひつこんでしまひます。お隣のおかみさん達が話をして居る處へ、行つてその話に加はらうとすれば、みんな話を止めてしまひます。そんな事でどうしてよろこんで氣樂に生活することが出來ませう。大抵の者は辛抱し乘ねて、もとの古巣へもどつてくるのです。又辛抱して居たと致しましても、何時の間にか商賣のお得意がなくなつてしまひます。先祖から慣れた仕事でなかつたら商賣はだん〳〵と儲からなくなります。自然と仕方がなく、自分の生れた場所に歸らねばならなくなります。精神上、物質上、大きな損失を受けるのです。その仕事と、その住む場所とがやはり限られて居る譯です。やはり交つては居ないのですね。差別が今尙取除かれて居ないのです。そして差別せられて居る人々は、限られた土地に暮らして居るのです。人々はどん〳〵ふえます。田や畑は昔のまゝでふえませんから、一人あたりの田や畑は年一年と少くなります。貧乏になつて行くばかりです。貧乏であるから着物も服も買へないのです。子供を學校にやれないお家も出來ます。貧乏ですから柴も少いです。だからお風呂へはいる事も少いです。自然垢がついたまゝで暮さねばならなくなります。着更への着物もないから着物も汚れたまゝで我慢しなければならなくなります。誰も垢のついた着物を着て學校へも行かずお家で子供を毎日おんぶばかりして居たい者はありません。けれどさうせねば食べて行けないからさうするのです。

陛下の御民に斯うした暮しをさせたのが一体誰でせう。世の中の人々の大きな、大きな罪では無いでせうか。差別して居る世の中が悪いのでは無いでせうか。一人一人が自分だけは近付かなくてもと

思つて厭な氣持でその人達を見ることが大きな、大きな罪を作つて居るのです。昔の歴史を調べて見たら、つまらない所から起つて來た問題であるのに何時までも、何時までも、こんな惡いことが改められないとは、日本の大きな恥であります。

末の世の末の末まで我が國は
よろずの國にまさりたる國

世界の國々の中で、一番すぐれて居る我國です。こんな過つた考へは、一刻も早く無くしてしまつて明らかな日本の國をうち立てねばなりません。和やかな道の國日本の本當の姿をあらはさなければならないのです。皆さんが大人になつた時には、こんな事がない樣に致しませう。皆さんの力によつてね。では休憩します。

〔第二話〕

私達が生きて居る此の世界には天地自然の法則がある。この法則が人間の力ではどんなに骨を折つても、どんなにつとめて見た所で、嚴として動かすことの出來ないものであります。私達が毎朝、朝會で行ふ体操の號令や伴奏を聞かして與れるあのラヂオに致しましても、隨分大きな發明ではありますけれど、何も新に拵へたものでは有りません。

數萬年前の昔より、此のラヂオといふものゝ原理がこの宇宙に立派に存在して居たのであります。昔の人は知らなかつただけで、ラヂオの原理は嚴然として何萬年の昔から此の宇宙に存在して居たの

であります。今日は色々と科學が進歩致しまして、色々のものが發明せられます。之等も發見でありまして決して作つたのでは無いのであります。コロンブスがアメリカを發見したのと同じで、前からあつたものを始めて見出したに過ぎないのであります。後の世から今日のことを見た場合、昭和時代の人々はラヂオ位聞いてよろこんで居たのか、といふかも知れません。まだ〳〵今後どんなものが發明されるかも知れません。

然しどんなに、便利なものが發明せられましても、それ等を人間は決して作つたのではなくてみんな發見せられたのに過ぎないのであります。自然は昔も今も、少しも變らないのです。自然の法則は昔から確固として存在するのです。太陽や月、星の運行にも、又自然の法則があります。それ等の天体は時を違へず、軌道を間違へず絶えず運行致して居ります。そして其等の法則も決して天文學者が之をこしらへたのではありません。地球の公轉が三百六十五日五時四十八分四十六秒を要すといふことも、昔から要したので、天文學者は發見し、計算することが出來るだけであります。動植物の世界にも又昔から今日まで變らない法則があります。おたまじやくしが手や足が出て來て蛙になるといふことは、昔からなつて來たので、今の學者は唯それを發見したにすぎないのです。又醫者にして見た所で、どんなに人間の病氣をなほすことが出來ても、決して人の身体をこしらへる事は出來ないのであります。こんなに天地自然に一定不變の法則があるが吾々がふみ行つてゐる心の世界にも、又一定不變の法則があります。吾々の行ひには、所謂人道——人の踏むべき道、人の辿るべき道といふもの

が厳然として存在して居るのであります。人は歩くとか、働くとかします。歩くことにも、働くことにも一定の法則があります。歩く事について考へて見れば先づ足で歩くといことがあります。手では歩けないのです。足で歩くと云つても足先も地面につけるのです。膝であるくのではありません。歩くのには足ばかりで歩くと思つては又間違ひで、やはり腰でその歩くことを助けます。又手も歩く働きをたすけます。手を振つた方が歩き易いです。それも足とたがひ違ひに振らねば歩けません。斯う考へて見れば歩くことだけでも仲々むづかしいです。一定の法則に支配されて居ります。そしてそれを人間はどうしても變更することが出來ません。精神の作用にも亦一定の法則があるのです。即ち人には他人に對して親和協同すべきであるといふ法則があるのです。是は天地の公道です。親和は親しく和す。協同は力を合せて助合ふ。この事が人道です。人の道であります。例へば吾々は今、斯うして一緒にお話を聞いて居ります。このお互ひが親和協同といふことが無かつたら、十分間も一緒にお話をきくことは出來なくなります。梅を見に行く者もあるでせう。話をしたい人もあるでせう。お腹のすいた人もあるでせう。それらの人々が自分勝手の望みをおさへて一緒になつて靜かにお話をきくのが親和協同の觀念であります。この親和協同の考へが人々になければ、一つの國におきましても、又一つの社會におきましても進んで行く事は出來ないのです。人々は互に相爭ふのが當然だと思つて居る人があるかも知れません。何故かといふと吾々人間の本性を表はすと必ず喧嘩するから、人間は屹度相爭ふ樣に生れて居るのだ。爭はなければ吾々は一刹も生活することは出來ない。お金を儲ける

爲に吾々は今爭ひつゝあるのだ。斯う云ふのです。でも斯う考へる人は割合に物事を淺く薄く見すぎて居るのです。一家の中で吾々は考へて見ませう。親は子を愛する。子は親を慕ふ。是は洵に自然であります。親子相背くことは大きな誤つた考へに違ひない。之は兄弟姉妹でも又同じことである。必ず相親まうとする考へがあります。お隣同志でもさうです。一般の人々お互は、相親しむのが自然の道理です。爭は自分の都合の良いことばかり考へる爲に起るのです。一つのお家の中で、食物が足りなければ、互に之を分け合つて食べる所に親和があります。自分だけが有餘る程食べて、外の家内の者を飢えさせることは私達の我慢出來ることでせうか。人はどうでもいゝ自分だけ美味しい物を食べればよい。こんな考へはいゝのでせうか。我國は、相爭ふことを本体とした國でしたか。いゝえ親和協力は天地の公道でありました。草木でも根や幹があつて枝葉がある樣に、我が帝國は皇室といふ大根幹が確立致しまして段々枝が出、葉が出、此ひ枝葉——國民が繁茂して來たのでありました。この根幹と枝葉とが厳然と茲に存在致しまして、皇室がだん〳〵御繁榮致しますれば、自ら枝葉は其の恩澤に潤ふて繁茂致して參ります。吾が帝國は一大家族であります。この一家は自然のもので決してこしらへたものではありません。自然の大法則のやうに、皇室は天神の御宗家で、我々國民は其の枝葉たる群神の末であります。其の間に親和協同の道は存するのであります。故に吾々お互は日本といふ大きな家の一人であることをしつかりと考へて見なければなりません。大きな中の我なのです。自分の五尺の身体にとらはれて、大きな我を忘れてはならないのです。親和協同といふ日本の道にそむい

たならば、國家の幸福はなくなつてしまひます。そしてそれがやがて、我々一人一人の不幸を生み出します。國なくて、何で吾々の幸福が望まれませう。國家がなければ吾々お互は自分で滅んで行くより外に道はないのであります。吾が國は相親んで來た國なのです。成程吾が國の歴史の中にも戰爭がありました。源平の爭ひ、足利、新田兩氏の爭ひ等があつたのでした。けれどそれは大きな光にたゞ影はさしたのに過ぎないのです。吾々の見るあの月は幾萬年の星からか知りませんが遠い昔から嚴存してゐるものに違ひありません。あの月が偶々雲がかゝつて見えないことはありますが、雲がかゝつたのだから月はなくなつたのではないのであります。之と同じやうにどんな立派な玉も塵がかゝつたならば光を失ふ。塵を拂ひ、雲散ずれば明皓々たる月が存在するのであります。日本の道も、雲がかかり又塵がつもつて光を失つて居た時もありました。今や吾々は、建國の大精神、親和協同の道を發揮すべき時です。建國の大精神から見ればこの差別などのことは實に憂ふべき間違つた考へであります。建國の大精神によつて一刻も早く親和協同の日本を打ち立てねばならないのであります。さあ今のお話は大變むつかしかつたですね。之で一休みしませう。

〔第三話〕

今日のお話は眼を廣げまして、世界の國々について申し上げることに致しませう。

世界の國々には澤山の人々が住んで居りますが之を大きく分けて白色人種と有色人種の二つにすることが出來るのであります。有色人種を更に又我々のやうに黃色い顏をしてゐる黃色人種と、阿弗利

加土人の如く眞黑な顏をしてゐるネグロ、即ち黑色人種、印度人のやうに褐色をしてゐる褐色人種に分つことが出來ます。

現在の世界人には約十七億二千萬と云はれて居りますが、其の中白色人種は五億六千萬で總數の三分の一にも足りないのです。この三分の一の白色人種は今まで全世界を支配して來たのです。有色人種十一億六千萬の中で獨立の体面を守つてゐるものは僅に五億七千萬で殘りの、五億九千萬約六億に近い人々は、皆白色人種五億六千萬にこき使はれてゐるのです。現在國をなすものは六十二と稱せられてゐるが、其の中で有色人種が作つてゐる國は十もあるなしであります。廣々として亞細亞に兎に角、獨立の体面を保つてゐるのは、日本、滿洲國、中華民國、シャム、イラン、トルコ、アフガニスタンだけしかないので他は全部白色人種の支配のもとにあります。アフリカでもその殆んど大部分は白色人種の勢力下にあります。そしてその白色人種――歐米人ですね――私達は有色人種を今までどんなに取り扱つて來たか、と申しますと、全く人格を無視した考へ方をして來たのであります。人間として取扱つて來て居なかつたのであります。その二、三をお話しするならば、

アフリカの東海岸に惠まれた土地にケンヤと名付けられた處がありました。天然の資源は大へん多い所です。印度人は一番最初に見つけましてアラビヤ海を渡つてケンヤに移り住みました。そして土地をどん〳〵開きました。ところが後からこのよい地を見付けたイギリス人は早速やつて來たが印度人が邪魔になつて仕方がない。印度人につらくあたりちらしました。澤山のお金をもたねばケンヤに

入れなくしました。印度人に澤山の稅金をかけて水道や公園や病院をつくりました。けれど印度人からお金をとつただけで水道も公園も病院も印度人に使はせてやらなかつたのです。一年にもうけるお金の六分の一の重い稅金を一人一人子供にも大人にも、女の人にも、全部とりたてたお金であつたのに、使はせて呉れないのです。一日中働かせて、十五錢か十六錢しかイギリス人がやらなかつたのです。印度人は腹をたてゝイギリス政府に談判しました。之がケンヤ問題といふものです。

アメリカに行くとこんな話が殘つて居ります。アメリカ大陸を西から東へ蜿蜒とつらなる鐵道に、サンターフエーラインと呼ばれるのがあります。この鐵道がつけられるために、澤山の支那人は雇はれて居りました。憲々鐵道が出來上りました。六百人ばかりの支那人がロッキー山の麓で賃金の支拂ひを受けるのです。六ヶ月分の賃銀と賞與とが支拂はれるといふのです。彼等六百人の支那人達は六ヶ月分の賃銀と賞與とを胸勘定して、三、四百弗にはなるだらう。そしたらそのお金をあゝして、かう使つてと豫想して笑顏をもつてロッキー山の麓に列をつくつて並んで居りました。するとあか〳〵と暮れて行く落日の美しい野の彼方から、お金を積んだであらう幾頭かの馬が、鈴の音も氣持よく近付いて來るではありませんか。あの重さうな荷物！あれに私達のもらへるお金がしこたま入つてゐるのだ。腹の底から込みあげて來る嬉しさをおさへて夕日を浴びて待つて居りました。丁度その時、突如として爆彈が彼等の足下に破裂して並んでゐた支那人六百人は悉く殺されてしまつたのでした。翌日の新聞には此の事について、ほんの二三行の記事が出て居ただけでした。

「工事用に使つた火藥の殘りが爆發して支那人六百人が不幸にも死んだ。」あの廣大なるアメリカの土地に恨もつきない之等の魂が何時何時までも殘つてゐるでせう。斯うしたことが數へれば數限りもない程あるのです。白色人種が有色人種を差別して來たのです。ロシヤが旅順に難攻不落の城を築きそれが出來上つて意々賃銀を支拂ふといふ時、指定された場所に集つて見れば、俄然として大地が辷り落ち頭上から土砂が落ち來り、幾百人の支那人が土砂と共にうづまつてしまつたといふ話もうそではあるまいと思ふ。イギリス人といひ、アメリカ人といひ、ロシヤ人といひ、皆有色人種の人格を無視して、こき使つて大きな國になつたのであります。アメリカに行つて驚くことは、文明の進んだことでもなければ、建物の大きなことでも、自動車の多いことでもない。黑人が何の罪もないのに、公衆の前で燒き殺されてゐることだ。斯ういつた人もありますが、實に殘酷な白色人種の行ひではないでせうか。今尙その虐待は當り前であると白人達は考へてゐるのです。

その中にあつて吾が日本は今までどうであつたか。德川時代は鎖國をして來て、內外交通絕へ、明治維新以來外國と條約を結んで明治三十二年不平等條約の改正等があつたのでした。日英同盟が結ばれてから最近までは有色人種が嘗めて來た苦しみは味はないで過すことが出來たのであります。然しそれは、日本を手先に使ふ爲に、日本人を苦しめなかつただけでありました。歐洲大戰後、日英同盟が消え去つてから、我が國は歐米から正しく見てもらつて來たかどうかを考へて見ませう。ワシントン條約やロンドン條約では、海軍の主力艦に對して差別をつけた。日本は一九二九年の平和會議に於

て人種平等案を提出した、しかしそれは白人達によつて否決されたのです。そして大正十三年にはアメリカでは排日移民法案と云ふのが議會を通つて實施せられた。今までは、日本人は有色人種でも、歐米人相手にして呉れるのだ。人格を認めて呉れるのだと、喜んで居た我が國民に、白人は移民が出來るが、有色人種であるお前が移民を絶對に許さないといふ法律を作り上げてしまつたのでありました。しかもこの米國は「自由と平和を愛す」といふ國なのです。それが世界の國々の前で、我々日本を辱かしめたのでした。白人に許すことが大和民族に許さない。之程大きなわけへだてをせられたことはないのであります。我が國民は歯をくひしばつて怒りました。けれど一年前の大正十二年には關東地方の大震災の爲に、百億の富と十萬の人民の命をとられて悲しみ弱つてゐる時でありました爲、辛さ、残念さをぢつとこらへて來たのでした。滿洲事變に於ても同樣であります。日本の正しい行爲が判つて居りながらも、國際聯盟の白人達は、日本の擡頭を恐れて反對して來たのでした。日本は白色人種だけが利益を受ける國際聯盟を潔く脱退致しました。日本を叩き付け樣とする海軍軍縮會議からもさよならをしました。

そして今や我が國は孤援孤立、野蠻の域に低迷してゐる有色民族をひきゐて人種平等のこの原理を白色人種の前に叩き付けてやらねばならないのです。人間がすべて平等であることを彼等に知らせてやらなければならないのです。大きな役目を負つた我々日本人ではありませんか。この時、その前吾々が先づ反省して見なければなりません。自分の家の障子のやぶれから、隣の家の障子のやぶれて居

ることをあさ笑つて居る人と同じやうになつてはいけないのです。英米人の尻馬にのつて支那を馬鹿にして居てはいけないのです。英米が支那をいぢめる番犬の役目をして僅な分け前をもらつて居た時代は既に去りました。日露戰爭の結果、日本が勝つたことを喜んだのは日本人ばかりでなかつた。印度人もペルシヤ人もトルコ人もアフガニスタンの人々も皆喜んで呉れたのです。白色人種と戰つて有色人種が勝つことが出來たのです。日本が勝利を得たのを見習つて、今まで失つて來た自由、いぢめられて來た苦しみより脱しやうと雄々しく自分の力で立上るべき源をつくつたのであります。この人々の信頼に答へて民族平等の原理を世界の前に確立せしめなければならないのです。互の人格を尊んで、總ての人々は皆兄弟となつて進んで行かなければならないのです。敬と愛とによつてのぞむ時は皆四海兄弟と云つた孔子の言の如く、敬愛の精神をもつて進んで行かなければならないのです。それにつけても先づ根本的な重大事は、國内に於ける悪い差別をとりのぞくことであります。皮膚の色も歴史も同じくする。陛下の赤子を輕んじ、そして其の人格を認めず、その住む所もその仕事も自由に選ばれない樣な仕ぶりをしてゐるとするなれば、昭和の日本として實に残念千萬なことであります。外にむかつて美しい言葉を吐くその前に、心中大いに恥ぢなければならないことではないでせうか。この非常時局に立つ我々が今尚國内差別問題を云々しなければならないとは何といふ恥づべきことでありませうか。世界に向つて堂々と正義を要求する前に、先づ足許の不正義を取り除かなければなりません。このことを取り除いてこそ日本が世界に向つて、人種平等を說く力があり、權利があるので

はないでせうか。

色々お話はしましたが、融和問題といふのは、その人の人格を尊敬するといふ意味からも、亦我國家的見地よりながめでもその使命の重大である事がわかりましたね、同じく神の御末の大御實です。そのお互がしつかりとくみ、朝鮮の新しい同胞、そして滿洲國の人々と相たづさへて世界の目に堂々日本の正しき道を說かねばならないのです。親和協同、敬愛の國日本の道を世界におし及ぼして行かなければならないのです。

〔第四話〕

差別といふことは大きな間違ひであるといふことを何度も〳〵申し上げました。

その出來た理由もつまらない所からであり、それに建國の精神からいつても間違つてゐるし、今の世界の狀況からいつても一刻もとりのぞかねばならない問題であることもお話致しました。では之から私達はこの間違つた考へをとり除く爲にどんなことが今まで行はれて來たかといふことについてお話申しませう。

この差別といふものをとりのぞかうとする運動を融和運動と名付けられて居ります。卽ち同じ歷史をもつ者同志の差別をなくする運動は融和運動です。とけ合ひ和するといふ字ですね。明治四年に「人ヲ差別スルコトガナイ」といふ太政官の布告が出ました。その頃一生懸命につとめた人々には、大江卓、前田三遊、中江兆民等があります。之等の進んだ考へをもつてゐた人々は、實際にも力をつく

し、又新聞や雜誌にもかいて、差別といふものは間違ひである。一刻も早くとりのぞかねばならぬとよく唱へました。でもその頃は餘り世の中の變化が大きかつた爲に一般の人々は眞面目にこの問題を考へて居なかつたのです。先がけの人は笛をふいても國民はそれに和して踊らないのです。

けれどそれが明治三十七年の日露戰爭が起つたのと共に國民全体のこの差別をとりのぞく運動に目をむける樣になつたのでありました。あちらこちらにこの差別をとりのぞく團体が出來たのでありました。岡山縣には眞先に出來たのでありました。

斯うして明治時代は終つて大正時代には、どうであつたか。明治より大正の始めへかけては、差別せられて來た人々が中心となつて差別をなくしやうとしたのでした。けれど大正へ來ると、差別して來た方から、吾々が間違つて居た一日も早く差別をなくしなければならないとさとつて差別をなくする運動に向つたのでした。

そして各府縣には、差別をなくしやうとする團体がつくられました。それが大正七、八年頃です。和歌山縣には同和會といふのが設けられました。そしてそれ等の府縣の融和團体にどんなことを行はうとしたかと申しますと、今まで差別せられて來た村は汚く道も惡くていけないからもつと道を廣くして井戸も美しくし、家もきれいにさせたら、差別といふことは直ぐになくなるのだ。斯う考へて改善をやつたのです。道も今までよりはよくなつて見劣りがなく、家も小屋のやうだつたのが草屋葺にもせよ、人の住む處らしくなりました。大した改善ではありませんが大体の改善が出來たのです。

この方法に對して辛抱出來なくなつて、差別せられてゐる人々は水平運動といふのをおこしました。之は差別せられてゐた人々は、人にはたよるまい。吾々自身の手によつて差別をなくしやうとしたのです。村が改善しても立派にならないのを知つたのです。改善しても仲よくしてくれないのを知つたのです。そして世の中で、差別したものを、どん〳〵制裁をして行つたのです。世の中の人は今更のやうに驚きました。そして先づ差別してゐる人々を改めさせねばいけないと考へました。

府縣の融和團体は澤山つくられました。そして世の中の人の誤りを正さうとしました。誤つた考へを正し、そして心からわびて、祖先の侵した罪ほろぼしの爲に吾々の差別されてゐる人々と仲よくしなければならないといひ出したのです。之を啓蒙運動と申します。

改善運動があつて、水平運動があつて、啓蒙運動に轉じて來たのです。

斯うして融和運動も昭和の時代をむかへたのです。今は内務省の中に中央融和事業協會といふのがあつて、その下に各府縣の融和團体があります。今中央の會長は平沼男爵であります。我が和歌山縣の融和團体は前にも申しました通り同和會と申しまして、縣の知事さんがその會長をせられその下に各郡に支會があります。融和運動に年々新しみを加へ乍ら今日まで進んで來て居ります。年寄りの人々は活動寫眞や、お話で差別のあつてはならないことを知らしめる方法もあれば又青年の人々や、婦人の人々に仲よくしなければならないことを知らす講習會を開いても居ります。

我が和歌山縣では人々は仲よくして行くばかりでなく、知らない人々にも知らせる樣に働かうとい

ふ青年眞生同朋團、女の人は光の朋團といふのを組織して居ります。清い青年や婦人の集りなのです。そして同和會のもう一つのお仕事として、差別する樣な言葉や行ひをした時にはこの人に融和しなければならないことを知らせいましめることがあります。それを差別事件といひます。近頃起つた差別事件とそしてその結果どんなに之を解決したかといふことを一つだけお話致しませう。

昨年の夏で御座いましたか、或村の役場で行はれたことです。或税務署の役人が納税のことについて視察に來たのです。丁度その村の中に差別せられてゐた氣の毒な人が住んで居りました。そしてその人々は、貧しい爲、一回に税金を納めることが出來なかつたので毎月少しづつお金をためて此の大切な納税の義務を果さうと納税實行組合をつくつて居たのです。この組合に對して、税務署の人は差別した言葉をあびせかけたのです。間違つた役人も居るものですね。すると丁度そこに居合はせた、同和會の役員の人は早速その人に、その言葉の説明を求めたのです。するとやつぱり間違つた考へをもつて居たのです。驚くほど古い考へをもつて居たのです。そしてその間違を正さうともしないのです。愛想をつかした同和會の役員の人は、その日はそれですませまして早速縣の同和會に眞相を通知しました。縣の同和會の役人の人は今一度實際の樣子を取り調べました。差別せられた納税組合の人々は怒りました。けれど喧嘩をしやうといふのではないのです。どこまでも正しく進まうといふのです。どうしても税務署の人々が改めなかつたら、大藏大臣の所まで交渉に行くといふのです。税務署の監督官である大藏大臣にその責任を問ふといふのです。この間に立つた同和會はその税務署の署長

と會してその象を啓き、人間に差別のないことを惇々と說き聞かせたのでありました、署長は心から部下役人の非をわび、そして將來益々この道の爲に進んで行くことを言明しました。そしてその結果稅務署員全体にこの融和問題の講演會が開かれました。二時間餘りのお話の中で煙草一本喫む者もなかつたと申します。眞面目に考へて居たのでせう。惡かつたことをさとつたのでせう。そしてその夜前の役人をつれた署長は、納稅組合員の一同に、惡うございましたと頭を下げておわびしたのでありますの。同和會の役人の方のお話やらおわびやらもあつて納稅組合員は、之から共にお國の爲につくしませうと喜んだのでした。この差別事件によつてこそこの稅務署員に融和の重大なることが知らされたのであります。そしてこの事件をきいた人々も、融和の大切なことや差別してはいけないことを心に深く思ひ浮べられたと思ひます。

やはりお互は日本のお家の兄弟ですから、間違つたことは、正しくして又後は朗らかに打ちほゝえんで進んで行かねばならないのです。このお話もどうやら終に近付いて來ました。私は皆樣方に判つて頂いた融和のこと、差別のおこりのことを今一度深く考へて頂きたいのであります。差別がある爲の悲しみ、そして百六十年程前からおこつたといふつまらない差別の歷史、世界の前に立つ日本の使命「人種平等」のこと、親和協同の道の國日本のこと、思ひ浮ぶれば長い間のお話でありましたがつまる處はむつかしい理窟ではありません。人を人として取扱ふことです。たつた之だけのことです。私達は大人となつた世にはこんな間違つた差別が、姿を見せない樣に致しませう。

融和運動の一番大切であり力强いことは皆樣が二人か三人の人に融和の道を說くことです。そしたらそれが皆樣に下された融和運動なのです。非常時日本の今日です。國民が仲よく相和すことは先づ大切な時です。仲よくさせる爲に說く私達の言葉は、やはりお國につくす忠義の心です。報國のまことであります。今は小さいが、こゝ十年もたてば立派な大人になる皆樣です。年寄つた者の人々は、もう頭に差別がさびついてゐて取れません。こびりついてしまつたのです。唯この學校を出て行く皆さん達を私達はたのみにしたいのです。みなさんがこのなつかしい校内を出て行つたならば二度とあの小學生としては學校に來ることはないのです。

皆樣方を八ヶ年の間敎へ導いた先生の最後の敎へとして皆樣が社會に出たならば決して人ふみにぢつてはならない。人の責格をふみにぢつてはならない。氣の毒な人と手をたづさへて明日の輝く、光を日本の國にむかへて下さることをおたのみします。よき日の爲に、正義の櫻、人道の富士を遙かに仰ぎ、差別の頑迷を打ちくだいて、君が代の行進曲につれて、錦の御旗の下に相和し、相親しみの生活を送つて下さい。

さしのぼる朝日の如くさわやかに
もたまほしきは心なりけり。

明治天皇陛下の御製であります。はれ渡つた大空に、淸らかに輝く朝日のやうに、少しも爭ふ所、へだて合ふ所なく、明かに心をもたねばならない。よき日の爲に、さうです。よき日の爲に進んで下

さい。私共の村の人の頭から差別をなくした日はきつと來るのでせう。皆様達の力によつて來させて下さい。よい村をつくる爲に。ではお話をこれで終ることに致しませう。

昭和十一年十月廿五日印刷
昭和十一年十一月一日發行

和歌山縣西牟婁郡朝來村
朝來尋常高等小學校
編輯兼發行者　三木庫一

和歌山市元寺町三丁目一番地
印刷者　塩谷總藏

和歌山市元寺町三丁目一番地
印刷所　塩谷印刷部

和歌山縣西牟婁郡
發行所　朝來尋常高等小學校

エト34-80